

波長が合うお経と出会う

下の三冊の経本は、左から『阿弥陀経』・『延命地蔵菩薩経』・『妙法蓮華経観世音菩薩普門品第二十五(以下『観音経』)』です。



日頃、私が自防や檀家さん宅で読んでいる経です。『阿弥陀経』以外は、私のお寺の宗派では馴染みのない、殆ど読まれていない経だと思います。私の場合、『阿弥陀経』が10%、『延命地蔵菩薩経』が40%、『観音経』が50%の割合で読んでいます。

何宗だからこの経を読まなければならないとか、そういうことも大事かも知れませんが、読んでいて幸せ感があり、うれしくなって元気になるという点で『延命地蔵菩薩経』と『観音経』が上位にきます。参詣者にも自ずと伝わっていると思います。

以前、迷走坊さんが、コロナ過で依頼されるお参りがどんどん減りつつあると心配されていましたが、私は全然感じていませんでした。理由は以上のことですが、お話しても理解してもらえないと思い、その時は何も語りませんでした。

自分と「波長」が合う神仏や経と出会うことは、とても幸福なことだと思います。

昔から人気のある寺院の共通点を研究したこと

があるのですが、多くの神仏が祀られ、自分と波長の合う神仏探しができるのだとわかりました。経もそれと同じだと思います。自ずと出会うことを望むことが肝心です。



『延命地蔵経』は日本で出来た経で、その独特の趣を最近になって感じるのです。私にとって一番波長が合う経は、やはり『観音経』です。きっかけは、意外にも柴咲コウさんのCDです。『観音経』の一部に美しい♪メロディーをつけて彼女が歌っています。それが『観音経』との出会いです。



観音菩薩が住んでおられる国「補陀洛(ふだらく)」は熊野灘の遙か南方にあると平安時代から信じられてきました。必然と那智勝浦の西国観音霊場一番札所青岸渡寺や、那智大社を訪れることが多くなりました。

そこから山を下ると、海岸近くに「補陀洛山寺(ふだらくさんじ)」というお寺があります。境内には、昔、補陀洛浄土へ行くために使われた渡海船がり、補陀洛山寺から25名の僧侶が観音さまの国へ旅立ったことが記録に残されています。もちろん渡海をするということは「死」を意味することで、お寺前の海岸に立った時の情景が『観音経』を読めば目に浮かんできます。

私にも前世があれば、渡海船に乗った僧侶の一人のような気がします。

俊徳丸